

特集

地域に生きる



盲ろう者の 地域生活支援

「盲ろう者」とは、ヘレンケラーのように、視覚と聴覚の両方に障害がある人のことをいいます。彼らが抱える日常生活上の問題としては、主に「移動」「情報入手」「コミュニケーション」があげられます。「目が見えず、耳が聴こえない」と確かに、外出や情報入手に健常者の何倍も時間がかかるかもしれません。しかし、最も重要なコミュニケーションにおいては、その手段が制限されるゆえに、「ふれあい」をベースとした温もりのある関係が築きやすいともいえます。今回は、地域で盲ろう者を支えるNPOを訪ね、ボランティアの皆さんに、盲ろう者の人たちとの関わり方についてお話を伺いました。

盲ろう者たちの 集いの場

天王寺区にある「NPO法人視聴覚二重障害者福祉センターすまいる」のセンターは、盲ろう者の人たちの仕事場です。手編みのマットや紙細工などを製作し、出来上がった作品は、地域のバザーなどで販売して、収益を活動資金に充てています。作業場には、マットの材料となる色とりどりの糸の束や完成作品が積み上げられ、それらに囲まれるようにして、盲ろう者が懸命にマットを編んでいます。「目が見えず、耳も聴こえない」彼らは、手や指先の感覚に優れていて、最初に編み方を習得すると、自分で作品を次々と創作していきます。

ふれあうことから 始まる

黙々と編み物をする盲ろう者がいる一方で、ボランティアやスタッフと、しっかりと両手を握り合って、上下左右に大きく動かしながら、楽しそうに笑っている光景がみられました。これは、何か特別いいことがあったわけではなく、日常的な会話のようです。健常者の場合、普段は言